

Fauriei Hack. はヒロハヌマガヤの花の咲く前の時期の標本に名付けられたものであつて花も瘦せて居るが果實が熟すればタツノツメと殆んど同様に大きな穎果が出来てしまひ區別が出来なく成つて来る。

4) ヤブデマリ——臺灣にもある。もつとも支那中部にもあるのであるから當然とも云へやう。場所は臺北州の太平山でキヤンラワとシキクン社との間で採集した。内地のものと同様に殆んど變らないが葉は比較的小形で毛茸が稍多い。

5) クリンサウ——之れも臺灣にある。場所は臺北州の南湖大山でまだ中腹の森林中に少しばかり生育して居た。之れも初めての記録であらう。

6) ヒメミコシガヤ——*Carex laevis* Nakai と云ふ朝鮮の植物で中井博士の説の通り。ヤマミコシガヤや内地のミノボロスゲに似て非な。はつきりした植物である。露西亞の學者が云つて居る *C. albata* Boott. と云ふ植物は恐らく之れであらう。私は初め九州等にあるツクシミノボロスゲかと考へたが分布の點で左様ではなくて此の種と考へた方がよい様である。所が之の植物らしいものを内地のしかも攝津國の山田村で採集した標本がある。山原種逸氏の採集で田代善太郎氏から頂いたものである。しかし標本は餘り完全なものではないので萬一の疑ひはあるがその他にも採集者不明の備中國川上郡吉川の標本があるから十中八九間違ひのない所であらう。

7) マツマヘスゲ——本邦の北部ではどこにも分布して居る植物であるが昨夏北千島の旅行では遂に同島で見出す事が出来なかつた。オホツク沿岸に極く普通の植物であり乍ら千島では得撫島以北に産せぬ事は面白い事實であると思はれる(もつと詳しく調べたら北千島でも出るのかも知れないが少くとも普通の植物ではない)エゾノカウボウムギも之れと同じ様な分布をして居ると考へられる。尙此のマツマヘスゲに匍枝を引くものがあつて *Carex fusco-fibrosa* Ohwi と付けたが之れは北川氏の云はれる通り *Carex tenuistachya* Nakai と同物である。北海道に在住せられて生品を豊富に觀察せられた北海道帝國大學の秋山茂雄氏は札幌附近では匍枝の出るものも出ぬものもあつて別種ではないと云つて居られる。しかし北鮮附近の自生地等を見るとどうしても區別した方がよい様に思はれるので變種にして區別を残す事にしたい。變種にすると匍枝の出る方は

Carex longerostrata C. A. Mey. var. *pallida* (KITAGAWA sub *C. tenuistachya* NAKAI) OHWI.

と云ふ學名に成る。

Orthomniopsis japonica BROTH. 九洲に産す

外 山 禮 三

日本特産で四國を原産地とする「タチチカウチンゴケ」が九州に産する事は考へられない事はないが、まだその報告がない様である。昨年の春(昭和九年四月廿三日)肥後市防山に於て *Mnium* の大形のものと思つて採集せるものが之であつた。古い *Sporogon* が澤山についてゐた。

抄 録

ハッチンソン氏：— 顯花植物 第二卷 單子葉植物 (J. HUTCHINSON: The Families of Flowering Plants, vol. II. Monocotyledons 1934)

著者が第一卷双子葉植物を出版せしは 1926 年で今回第二卷を著し、裸子植物は *Kew Bulletin* (1924) に掲載したれば氏の顯花植物は漸く完結せり。

氏は單子葉植物を以て 單元系統のものと思ひ、即ち双子葉植物中の多心皮目 (*Ranales*) を先祖として單子葉植物中、離生多心皮、多雄蕊を有する沼生目 (*Alismatales*) 及びトチカマミ目 (*Butomales*) を生じたりと考ふ、前者にはオモダカ科 (*Alismataceae*) シバナ科 (*Scheuchzeriaceae*) サクラキサウ科 (*Petrosaviaceae*) 後者にはハナキ科 (*Butomaceae*) トチカマミ科 (*Hydrocharitaceae*) を屬す。

單子葉植物の多くと毛茛目とは共に 胚乳を有するのは通則であるのに最下等の二目は之を有せず、氏は胚乳のあるを以て原始的の性質と見做すを以て之には少らず困却せしものゝ如く、此最下等二目に胚乳なきは水生植物の故なるべしと云へり、氏は胚乳を以て *Prothallium* と考ふるを以て、かく云へども被子植物の胚乳は卵受精後の重複受精の結果生じたるものなれば下等のものは却て之を有せざるべく、裸子植物の如きは一般には重複受精の事なし、されば毛茛目と同一祖より出發して以上の二目は多心皮多雄蕊の程度の低いことは進んでゐるが胚乳のなきは却て毛茛目よりも原祖に近き原始的性質を保有すと抄録者は考へる。

沼生目より先第一に同被花綱 (*Calyciferae*) を展開せり、同被花綱は二輪の同花被を有し多くは水生又は濕地生にして終に花被の退化と單性花の方向にすゝめり、即ち本郷草目 (*Triuridales*)、*Juncaginales*、レースサウ目 (*Aponogetonales*) と進みて終に茨藻目 (*Najadales*) を以て寧ろ退化に傾けり、又一方ツユクサ目 (*Commelinales*) より鳳梨目 (*Bromeliales*)、トウエンサウ目 (*Xyridales*)、ホシクサ目 (*Eriocaulales*) を經てシヤウガ目 (*Zingiberales*) に到り最高等となれり。

一方トチカマミ目よりは先づ原始的の百合花目 (*Liliales*) を生じて遂に両被花綱 (*Corolliferae*) を展開せり、即ち本綱には進化の経路をたどる蘭目 (*Orchidales*) とア